ロウイルスによるFDCの破壊と免疫不全の関係の検索に有用な疾患モデルと考えられる.

16. IL-2活性化Tリンパ球のCD16抗原

（血液内科）　福田淳子・金子多香子・押味和夫・溝口秀昭

〔目的，方法〕我々は，インターロイキン2（IL-2）で活性化したT細胞にCD16抗原（FcγRIII）が発現することを見出した．CD16抗原を認識するエピトープが異なると考えられる2種類の抗CD16抗体（Leu-11，OKNK）を用い，3カラー解析を行った．

〔結果〕TCR-αβ陽性細胞は，培養前にはLeu-11もOKNKも陰性であった．3週培養後には，Leu-11陽性細胞は2～4％，OKNK陽性細胞は30％であった．培養前のTCR-γδ陽性細胞のうち，Leu-11陽性細胞は1～7％，OKNK陽性細胞は25％であった．3週培養後には，Leu-11陽性細胞は3～24％，OKNK陽性細胞は33～84％であった．

〔結語〕培養前のTCR-γδ陽性細胞や，3週培養後のIL-2活性化T細胞には，Leu-11では認識できないがOKNKでは認識できるCD16抗原が発現していることが分かった．

17. 胃癌細胞と溶連菌製剤OK-432との共通抗原性について

（第二病院外科）　小川健治・勝部隆男・三浦一浩・我妻美久・矢川裕一・梶谷哲郎

〔目的〕近年，腫瘍細胞と溶連菌との間に共通抗原の存在が報告されている．そこで今回は，まずヒト胃癌細胞と溶連菌製剤OK-432との間に共通抗原があるか否かを検索し，さらにその有無と胃癌組織への単核球浸潤の程度との関係を検討した．

〔対象と方法〕切除胃癌22症例（24～89歳，進行程度stage I～IV）を対象とした．共通抗原の有無はその切除標本を用い，1次抗体に抗Su抗体（抗A群溶連菌Su株血清）を用いてPAP法で検索した．胃癌組織所見への単核球浸潤は，同じ標本でとくにリンパ球浸潤の程度を検索した．

〔成績〕OK-432との共通抗原は22例中10例に認められ，陽性率は45％であった．リンパ球浸潤は，共通抗原陽性症例では10例の全例に，陰性例では12例中8例（67％）にみられた．

〔結果〕ヒト胃癌細胞とOK-432との間に共通抗原が認められ，その陽性率は45％であった．この共通抗原陽性例にOK-432を投与すれば，腫瘍局所により強い抗腫瘍性免疫反応の発現が期待される．

18. ミエリン塩基性タンパクの免疫特異部位について

（神経内科）太田宏平・江島光彦・田中久恵・植田美加・橋口孝子・丸山勝一

〔目的と方法〕ミエリン塩基性タンパク（MBP）反応性T細胞株を作製し，これまで主に欧米人に報告されたMBPの抗原特異部位と比較検討した．

〔結果〕健常者8例と多発性硬化症（MS）8例のMBPT細胞株の出現頻度の平均はそれぞれ4.7±3.2，8.2±3.6％であり有意差は認められないが，MSで増加していた．また，MBP84-102に対するT細胞株は健常者，MSよりそれぞれ11株（29.0％），22株（36.1％）が得られ，この部位に対してより多くの反応性が認められた．

〔結語〕MBP84-102に主要な抗原認識部位が認められたことは，欧米人で報告された結果と同様であり，MBPのT細胞抗原特異部位は人種を越えて共通であると考えられた．

19. B型慢性肝炎発症機序の免疫学的解析

（消化器内科）　米満春美・中村哲夫・青柴智子・加藤純子・三橋容子・島居信之・磯野悦子・徳重克年・長谷川潔・山内克巳・林　直諒

B型肝炎の発症機序は明らかにされていないが，肝炎は細胞障害性T細胞（CTL）が肝細胞表面上のHLAクラスI分子と結合したvirus関連ペプチドを認識することにより生じるとされている．我々はpreS2領域の最初の39塩基の遺伝子配列の多様性に着目し，肝炎活動性との関連につき検討した結果，HLA-A24とadr型preS2，HLA-A2とadw型preS2の組み合わせが肝炎発症に必要であると考えられた．これを証明するため，preS2の合成ペプチドをpulseしたEBV transformantsを標的細胞として，B型肝炎患者の末梢血リンパ球の細胞障害性を調べた結果，これらの組み合わせで標的細胞が認識された．以上よりpreS2がCTLのエピソトープであることが示唆された．

20. IL-1による上皮細胞依存性気道拡張効果

（呼吸器内科）　玉置　淳・多賀谷悦子・千代谷厚・坂井典孝・磯野一雄・金野公郎

近年，IL-1βは喘息病態の発症に関与するサイトカインの1つと目されている．本研究では，気道平滑筋